

降矢さんに聴く (第二 巻A・B面)

(収録 1970s 後半?)

(テープ起し 2009/04/14・15・20)

修正1 2014.9.11

降矢：寒くなれば大丈夫だろうが、夏はちょっと通れるか通れないか、通れないことはないだろうが、・・・。

木俣：山登りの人なんかいるんじゃないですか。

降矢：尾根かね。

木俣：西原峠を越えるような人は居ないんですかね。

降矢：多少はね。

木俣：ぼくは、バス乗っていても乗り合わせたことがないから、・・・。三頭山なんかに行く人はいないみたいですね、こちらから、・・・。

降矢：うーん、まあ、いるとしたら土曜、日曜あたりでしょうね。まあ今頃からそろそろ、それでもな、子供だけでもという・・・会社に行っている人はたいがい土曜、日曜ですからね、・・・。

木俣：明日の日曜は南アルプスに行こうかと思ひまして、ふた晩くらい泊まって。

降矢：まったく日本もだんだん雑穀を作っている人は少なくなったでしょうね、・・・。

木俣：西原だけはそれでもすごく多いでしょうね、今でも。

降矢：ことしはツミ(小鳥?)が、ワシらの部落では珍しく・・・、この路の上では何軒もキビを作ってまさあ、五、六軒は、今年は珍しく大勢作っているなあ。まあ、いったいが作るものもないですよ。あれね、昔は、ジャガイモをうんと作ったものだが、いまは家族人数が少ないから、ジャガイモもあんまり作っても食べきれないから・・・。といっても、やっぱり保存しておくすると、キビかアワ、芋は保存となると、・・・。

木俣：そうですね、保存となると、・・・。藤野の方ではお茶を奨励しているのですか、お茶畑がたくさんありますね。

降矢：この辺でもね、お茶を、・・・。前に苗が入ってきて植えていますけどもね、この付近はね、ちょうど低地は霜がはえるのでお茶は駄目だ。お茶は山に寄ったところでないと・・・。温かい霜に痛められないところでないと・・・。そう言った広い土地が部落ではお茶をやっているということだね。よく、畑をすると、蒟蒻畑が多いですね。

木俣：蒟蒻畑、多いですね。

降矢：蒟蒻もあきちゃってね、値が安いし、(金が?)取れなくなっちゃった。あんまりにも蒟蒻はネセ?時代に〇〇あるなしでしょう。

木俣：すると、いまはなにがいちばんいいのですか、・・・。

降矢：桑とそれから場所によって蒟蒻畑、お茶。

木俣：それも入れて、あちらは桑ばかりですね。

降矢：なかなかお茶は、完全に採れるまでは(歳月が?)だいぶ手が掛かってね、・・・。

草がでますしね。若い人たちは、杉と桧を植えたりしても、山にしちゃって
るし、・・・。

木俣：・・・ずうっと廻りまして、百部落ほど廻っているのですけれども、西原の
付近のムラをですね、・・・。それで、どうして西原に雑穀が残っているか
ということを調べようと思って、・・・。

降矢：結局、西原、綱原、まあ佐野川村も、ワシヤ行ってませんが、まあ、ほとん
ど環境が似ていますからね、・・・。結局、連中は他に一、時代の新しい仕事
にとりつけませんから、損でも得でも百姓をやっている。百姓苦から雑穀の
土地だから雑穀をやっているということではないですか。もっと他に切り替
える好い仕事があればやらないでしようが、・・・。百姓を辞めて切り替えて
ということも、連中にはないから、・・・。

木俣：後を継ぐ方は全然いないですね、・・・。

降矢：まあ、居ないですね。仮に居てもやっぱり老人になればやるでしょうが、・・・
若いうちは百姓やっていたのでは、いまの時代には、**シャアイ?**がとれませ
んからね。**地代?**を伴った仕事でないと、よほどそのお金でもあって、もの
好きにやっているのなら別だが、生活が伴っていて、百姓をやっているのは、
今はなかなか厳しいですからね。ワシなんかもまったく早よ、百姓なんか止
めたって、・・・。別に他に仕事がないからやってますけど、いちばん当惑す
るのは、雑穀をその製粉や精米するところがないんで困るんでさー。

木俣：いやあ、皆、聴くところ聴くところで、加工するところがないと、・・・。

降矢：いやあ、それで止めた人も多いので。それでね、町まで行くとね、雑穀を精
米してくれるところもありますかね、・・・。

木俣：ちょっと聴きましたのは、キビとかアワとかはモチのままつけるからいいん
だけれど、メシのものはつけないから、そっちの方が早くなる・・・という
意見もあるんですけど、そうですかね。

降矢：それー、モチの方がね、そう収量は少ないですね。コメでも何でもモチとい
うのはね、・・・。ただ味が好いでさあ、モチの方が、・・・。結局、そう
なると、収量が少なくとも味が好い方かということに、なるでしょうね。ご飯
に炊いてもモチの方が好いでさあ。

小俣：少し廻っていて気がついたことですがけれども、奥多摩の方の小菅とか丹波の
方にはモチアワの方がたくさん残っています。・・・で、西原とか綱原の方はと
いうと、メシアワが殆どなんですね、・・・。アワのほうは、・・・。

降矢：綱原はね、昔はアワがたくさんとれたところ、モチではなくてメシアワをた
くさん作ってさ、西原の方はワシが覚えてからでは、モチの方が多くて、モ
チでないアワは本の少ししか作っていなかった。

木俣：いまはメシアワの方が多いようですけども、そうではないですか、・・・。

降矢：さあ、ワシヤ、近頃は知りませんがね、まあ、気温がともかくね、モチに食べるというよりも、ご飯に醤油を入れてね、珍しく食べるということで人間はあるようです。でね、ご飯に醤油をちょっといれと、モチアワの方が味が良いですね、・・・。

木俣：でも収量がちょっとモチの方が少ないみたいですね、・・・。

降矢：まあ、コメでも何でも、モチ性の方が全部、収量が少ないです。アワでもトウモロコシでも、何でも、・・・。

木俣：アワめし？があるとか、粘りとか、口触りがご飯に炊いたものですからね、・・・。

降矢：ワシね、やろうと思ってよく分からないのは、あの満州の方で作っているコーリヤン、あれはこの辺で作るあの穂モロコシという奴のね、ウルチ性だろうと、・・・で、この辺ではウルチ性のものはないですね。

木俣：ないですか、ホウキモロコシというのはどうですか、作ってませんか、・・・。

降矢：ホウキモロコシは珍しくて、つくってもあの実は誰も食べない。

木俣：でも昨日、数馬、笛吹という部落に行ったら、あそこの方がコーリヤン作ってたと言っていたが、西原では、・・・。

降矢：多分そう言う・・・、西原ではウルチはない、作ったということは聞いたこともないです。それで滅多にないのは、トウモロコシのモチ性ではないですか。最近、アメリカ産のハニーとかいうのは、あれはモチ性ではないかと思うのですが、・・・。

木俣：調べたことはないですけども、粘りは良いようですね、・・・。

降矢：ええ、あれはねワシ、一回作ったのは、・・・木曾のを貰って作ったのがモチ性だった。

木俣：クスリにつけるとすぐ判る方法があるのですが、・・・。

降矢：ただねー、あれはよほど骨折らないとね、もう一年うっかりやると交配して駄目になってしまう。よほど他にモロコシのないような土地を選んでやらないと、・・・。

木俣：ウルチ性の方が強いですからね。

降矢：うん、だから飽きちゃってね、長く計画してそれを作るという訳にはいかないのだ、・・・。

木俣：トウモロコシのモチの仕事というのは、アメリカ人がものすごく研究をやって、日本人はトウモロコシ、あまりやっていません。

降矢：多分、ワシもそう思う。

木俣：ウルチの花粉が着いたらもう駄目だから、・・・。

降矢：あれくらい○○○作物も少ないですね、あれとか十字花植物とか、・・非常に。だから寒冷紗などを張った中に種子(たね)用を入れておくとかしないとね。農家ではそれほどのことはやっておれないのですね。

木俣：いまハトムギのことをずっと調べているのですが、ハトムギなんかも雌雄異株というか、花の咲く時期が違うんですね。だから同じ株を維持するの
もできないのです。十字花植物ですと自家不和合という性質があるから、自
分の花粉じゃ種子ができない。それで他の花粉が着かないと駄目ですから、
よほど難しいんですね、維持するのは、すぐ交配してしまう。

降矢：ワシは前に、名前はなんだったか、ちょっとライ麦に似たムギだったが、・・・
コムギの原種だろう・・・というのを作ったことがあるんですがね、・・・。

降矢：ニーデーケー（二粒系？）のコムギでしょうかね、・・・。

降矢：ライ麦に似たような、これがコムギの原種じゃなかったですかね。何せ食べ
てあまり美味しくなかったですね。

木俣：いまライ麦のことをずっとやっているんです。ハトムギとライムギを仕事で
やっていて、・・・。

降矢：ライ麦はワシもね、作ったことがありますかな、あれは寒さに強くてねー。
ワシの畑のいちばん寒い畑でも越冬するですわ。ただし、そういう寒さでは
ねえー、・・・。

木俣：暑さに弱い。

降矢：作るとね、今頃でしょうね、収穫期が・・・、遅れてね。

木俣：この辺から今になるでしょうね。

降矢：その割に畑が○○なくてね。

木俣：そんなになりますか、自分が作ってて2メートルにはならないかな、1.5メー
トルくらいかな、・・・。

降矢：これはね、ワレムギ？ではないんだな、わら帽子なんか加工する殻をね、・・・。

木俣：私は黒パンが好きですが、日本人の口には合わないみたいですね、・・・。

降矢：ワシヤ、パンじゃなかったけど、お餅にこしらえたけど、なんというか、歯
にネバネバしてね。そのときは女衆が捏ねてね、やっぱりのりへんに強い
というか粘ってね、木鉢にくっついてしょうがないなんてね、言ったですね。

木俣：ちょっと、日本人の口には合わない感じですねえ。

降矢：熱しては食べてみなかったなあ。ちょっとお餅をとかね、うどんなんか
にね、・・・そればかりではないです。在来のコムギの粉を入れてまぜなきゃ
美味しくないですからね。何か、取り上げてもあんまり背丈がでかくて処理
に厄介で飽きちゃった。でね、止めちゃったです。

木俣：そんなに丈がのびますか、・・・。

降矢：ええ、それで止めちゃったです。

木俣：じゃー、いろんな種類があるから、・・・。自分で貰って、アフガニスタンと
いう国のを貰いました。

降矢：ワシは何処の国のライ麦か知らないがね、・・・その頃、南都留で作っていて、
南都留は寒いですからね、・・・向こうで作っていたのをもの好きで貰ってき

て作ってみた。

木俣：いま、もうライ麦の原種になったライ麦を普通に食べるライ麦と交配して、その子供をずっと調べているのですけれども、・・・。

降矢：ワシもね、近頃は、そこらにはあんまりヤル気がないんでね。ヤルちゅうとね、・・・いろんな種子を貰って何でもかんでもよく作ってみましたですけどもね、・・・。フフフ・・・。

木俣：栃谷という部落がありますね、佐野川村の、陣馬山の下の部落ですが、そのPTAの会長をやっている人が好きで、いろんなところから種子を貰っては作っているらしいです。杉本（源十）さんというおじいさんからチョウセンビエを貰ってつくっている、・・・。どっか行っては貰ってきて作っている。

降矢：ああー（うなずく？）

木俣：山岳部の会長をやっていたとき、今、50歳になっていない方で、・・・。

降矢：去年、南信濃（もしくは諏訪？）から、わざわざシコクビエを探して訪ねてきた人がいて、そこでは昔は作っていたらしいが、それが気がついたら何処にももうない、・・・。それでね、行商の人がここらをよく通ったことがあってね、・・・西原行くという・・・

（奥様の声が入って・・・聴きとれない・・・）・・・どうなったか、穫れたかどうか、・・・昔作っていたところだったかね、・・・。

木俣：20年前には作っていたんですから、・・・。

降矢：何でも、五、六年のうちに無くなったようだ。気がついたらもう、欲しくなったけれどももう、見つからない。今度は種子を必ず切らさないで○○○・・・やっている。

降矢：何かいかがですか、・・・。（お茶でもすすっている様子・・・）

木俣：少し廻ってみますと、「ない、ない」といわれながら、結構、作っているのですね。どこの部落にも一人か二人、おじいさんが居て、・・・。どこでも保存しているのですね、意外と、・・・。ないところは全然ありませんけれども、・・・。それをですね、・・・。

降矢：小菅と丹波山ではあったかなかったか知らないかね、シコクビエだがね。

木俣：小菅はありました。

降矢：ワシがやってね、いまでは本人が作っていないにしろ、その種子を次から次に継いでいるらしいです。

木俣：小菅は二軒か三軒ありました。小永田とか白沢という部落です。丹波山はなかったですね。

降矢：丹波山よりも暖かですね。たいがい最後は精米で、加工で、・・・。

木俣：そうですね、自分の家に手臼でも在る人は、ちょっとずつでもやっているでしょうけれども、水車も西原くらいであとは何処にもないですから、製粉場もなかなか、雑穀まではなかなかやってくれないでしょうし、・・・。

降矢：よほどもの好きでないと、自分で小規模な自家用の製粉機でも買ってというのであれば、・・・西原では小規模な自家用のは何軒かあるのだけんどね、・・・なかなかそれもやるのは大変だし、・・・。

木俣：栃谷の部落の人は、自分で全部揃えてやっているのですね、自分の家で持っているから。

降矢：はあー、結局、もう一度あの食糧事情の悪いというような時代がくれば、また復活するかも知れんが、米が余るほどとれている時代はどうも雑穀はね、・・・。身体に良いのは良いのだが、食べられるようにするまでが面倒でねー、やれたもんじゃないですよ。

木俣：そうですね。この先はどうなんでしょうか、やっぱり困るようなときは来るんでしょうかね。お米はとれているし、・・・。

降矢：さー、わかんないですね。案外あの石油事情で変わりますから、だんだん深刻になるという、これもえらい支障がでるのではないですか、・・・。

木俣：石油がないと、ハウスなどもできないですしね、・・・。

降矢：ええ、全然できないというほど石油がなくなりはまだ、・・・とにかく高くなるとねー、農作物がね、そういう物を作っても市場価格があるか否かということが問題ですからね。あんまり経費がかかりすぎると、・・・そいで、田植えも機械植えとか、なんだとって、だんだん燃料が高くなるという、まあ、大量生産をやっている土地はいいけど、小規模な農業はどうですかね、・・・。こりゃ日本として、エライことになるんじゃないですかね、だんだんと、・・・。

木俣：でも、そういうこと、皆、本気で考えていないから、・・・。

降矢：へっへっへっ、・・・まあ、日本人は特にそうできあ。

木俣：困ってからでは遅いんですよ。考えないんですから、・・・。

この間、あの一、自分の先生のおいでで京都大学に行きまして、そこで皆からなんだかんだ言われたんです。その中に奈良の方で雑穀の調査をしている人がいるんです。そうした人と話をして、雑穀の調査してどういう意味があるのかと、言うのですね、・・・。するとやっぱり日本の農業は米中心だから、雑穀というのはいずれ消えてゆくのだと、・・・。そういう物を調査して、保存してもどういう意味があるかと言うんですが、どういうものですかね。

降矢：これもその系統、系統で考えかたによっては、昔の生活をしのぶには、昔の食べた物を調べなければ分かりませんね、・・・。

木俣：自分はそういうことも思うんですけども、もうちょっと前に向かってですね、日本の農業の中では中心ではないと、これは確かですが、・・・。だけどもある程度の位置は今後も占められるのではないかと思いたいんですが、どうもそういう感じでもないし、いまはそうですね。先はどうなるかわかりませんが、・・・。

最近是非常にどうも、農村なんかでも血圧が高くて、私の親なんかも血圧が高くて、麦飯を食べる、白米はあんまり食べるなど言われている。

降矢：やっぱり雑穀にも何かワシら日本人の体質に合うというか、健康体を保つのに良いというようなことが、学者によってはっきりさせられて……。すると、命の大切な人はまた食べだしたりして、……。

木俣：古守先生なんか、いつも本をたくさん送ってくださるので読んでいるのですが、やっぱりあの人の言うことは分かるんですね。日本人はそんなに身体が大きくなるのではないと思うのです。小柄の方が日本人としては良く合っているし、だいたい何やっても小柄なの方が元気ですね。

降矢：だからね、やっぱりその一、沖縄行くと歴史は廻るといのが……。食べ物は多少循環するのではないですか。まあ白米が本当に主食になってからまだそう長くはないでしょう。

木俣：ですから、世界農業センサスなどを見ますとですね、1950年というのが最初ですけれども、東京の真ん中でチョウセンビエ作っていたわけですね。みんなそれ食べていたのです。ですけど、いまは、日本人は昔から米しか食べていないように、何でも書いてあるのです。そんなことないのにね、……。

降矢：まあ、戦後だったかは……。よく聴きとれない……)

家畜飼料用のヒエと人間用の食べるヒエと種類がそういうところでははっきり区別されていて、人間の食べるヒエの種子をもって来たから作って見ないかと勧められたことがある。なんぼもの好きでもね、ヒエというのは皮がむずかしい。厄介ですから止そうと作らなかった。

木俣：そうですね、加工が難しい。一番先になくなりますね、……。ハトムギなんか如何ですか、なんならお送りしますけれども、……。

降矢：ハトムギは、ワシヤ、作ったことがなかったな。

木俣：南都留の方では作ったという記録があるんですけど……。ハトムギは健康に良いとあって、最近を作る人が増えてきているんです。

降矢：何か、どこかでみたですよ、ハトムギを、……。やっぱり、薬用のために、……。

木俣：日本では薬用ですがフィリピンとかそういう方面ではおかゆとかで食べている。ハトムギはみんなモチ品種でウルチ品種はないです。今年は朝鮮のをもらいました。10品種ほど貰って、栽培して、調査しているんですけど、また、秋には、中国とかネパールのを貰って、また来年やってみようと思っています。自分が行かれればいいんですけど、なかなかまだ、……。来年うまくゆくと行けるかも知れない。中国もネパールもまた調査希望を出しているんですけども、大分費用がかかるので、自分の給料だけでは行けませんから、……。

降矢：そうですね、それにあすこはまだなんといっても交通もいまの世界では不便な土地のひとつでしょうね、……。

木俣：いまこういう雑穀をずらっと調べてですね、で、計算機、コンピュータであ
あいうのでも借りてやっている人に頼んで、センサスの数字と合わせて、い
ろいろ関係をとって見て、西原にどうして多く残っているかをだそうと思
うんです。街から遠いとか、いろんな理由があるんでしょうけれども、・・・。
どういう理由でしょうかね、・・・。

降矢：（・・・聴きとれない・・・）結局、ここが現在、いちばん奥になっているの
かな、・・・。

（A面終了）

（第二巻 B面）

（テープ起し 2009/04/20 - 25）

降矢：前は、西原はどうなんだか、・・・。

木俣：昔は丹波山、小菅、西原、綱原という順で奥だったわけですね、それが、小
菅に道ができてきて、すると小菅が拓けてきて、今度は丹波山の方に青梅街
道が伸びて、向こうの方が東京寄りになってしまったわけです。道路が出来
ることによりどんどん変わってきて、これでいま西原がいちばん奥だという。

降矢：そういうことがもう一つの原因じゃないですかね。昔の百姓の形態が、まあ
雑穀を作っているということが、昔の百姓の形態が後まで残っているとい
うことですね、・・・。

今の時勢がつづけば、西原もほとんどもう雑穀、最近、こう作って、・・・？、
やっぱりキビはとれないな、・・・小鳥が食べさせなければ、・・・。

（「お昼のご飯を！」・・・という奥様の声・・・）

木俣：でも、弁当を持ってきましたから、こここのところ毎日出かけていますので、・・・。

奥様：ウチの田圃でとれたものですから、お召あがりください。

木俣：じゃあ、このパンでも食べてください。悪くなるといけませんので、・・・。

奥様：すみませんね、・・・。

降矢：十二時にならないか、・・・。

木俣：そういうことで、いま一つ今年中にまとめようとしているのです。けれども
その後でお話を伺って、本をつくたらと思うんですけども、どんなもので
しょうか、来年、再来年あたりにでも、・・・。

降矢：ええー、作っていただくのは結構ですけども、ワシは物ぐさだからねー。

木俣：それですね、こういう風に作るということを決めて、僕が話を伺いに来て、
それをテープに収録していますから、それを起こして、下書きを書きますか
ら、・・・。それをもう一回見ていただいて、直していただく。で、まとまら
ないかと思うのです。ずうっとこの辺の写真なんかも沢山載せてですね、そ
ういうのを『雑穀の村』という本を作ってみたらどうかと思うのです。

降矢：それは、・・・面白いでしょうけれども、・・・、ええ、・・・。

木俣：やっぱり、それを残しておかないと、先のことはわかりませんが、そういう……。自分が思うのは、やっぱり日本人のモノの考え方というのは、もともと山ですから、自然の中でいちばん何が好きだというと山だと応えませんか？、日本人が、……。ですから、山の生活を基本にしているわけですから、山の生活がどんなものかということをしつかり出して置かないとですね、……。

降矢：この辺は山だから、ワシは山だが……。海辺の人たちも皆、そう思っているのだから、……。ワシはその辺りがわからないのだが、……。

木俣：日本人自身がずっと山に暮らしていて、……。

降矢：はあー、やっぱり山岳民族ですかねえ。

木俣：そう思います。山を出たのは後の話で、……。

降矢：その点、ワシは、……ずっと昔から、この辺では高い山にはあまり登らなかったですが、……高い山には神がいる、仏がいるような風を感じているんじゃないですかね。だからお盆にしても正月にしても、なんでも高い山の上からくるような気持ちで迎えていたようですね、……。

木俣：ですから、西原のそういう日常の生活とか、伝説とかをですね、そういうものを記録として残しておいたらよいのでは、……。

降矢：徳川時代になってからでしょう。正月になったのはわからないから。誰にも分かりの良ように高い山に疎外？していたのじゃないですかね、……。……山岳主体の神も仏も一緒だからね、その時代は。神仏混淆だから、……山岳宗教だから。

木俣：東京の方ですと、桧原村や奥多摩村など、いくつか本書いている人がいるんですが、そういう本を読みましても、もうひとつ面白くないものがある。

降矢：ワシも桧原村出身人が書いたものを取り寄せてみたんだが、それも買ったばかりでまだ読んでいない。尾根一つ違うだけなので西原の方も関連として書いてあるかと思うたが、何も書いていないのだね。向こうは向こうでね。山梨県に、桧原の半分が西原に属していた、そういう地図にあるらしいのだが、……。

木俣：自分はずうっと廻っているが、そういうことを聞いたことがある。最近、いまの地図は川に沿ってたてに張る？ようだ。昔はそういう道路がないから、峠を越えて交通していた。そっちが中心だったのですね、……。

降矢：この間、テレビ見ていたら、桧原へはこっちから拓けていったのだという。

木俣：そうですね、こっちから拓けていった、……。

降矢：ところが桧原村の本を見ると、そんなことはないだと、……。向こうはこっちの下になるわけにはいかない。独自に拓けたと考えたい。こっちから拓けていったのが真実のようなのに、……。

木俣：もう一つはそういったことを広く見ていないということがある。佐野川村に

行ったって酒饅頭や何やら作っているわけですね。神奈川県なんだけれど、作るものというところの綱原、西原と同じものを作って食べているのですね、……。だから、文化としてはこちらのものなんですね。生活はこちらと一緒に、そういう風に見ないからおかしなことになる。もう一つは地元の人がなかなか書かないのです。

降矢：ワシらの方、調べてみたらよ、綱原の方とあまり往来はしないでよ、**西原峠？**から、綱原は抜きでよ、五日市の方面に、……。向こうと往来して暮らしていた。それから、大菩薩峠を越えて塩山の方と往来していた。上野原とはあんまり往来が少なかった。なかったということは、綱原とは、……。細い道しかなくて、とても馬が通れるほどの道ではなかったらしいからね、……。他への道はあまり手間がかからず馬が通れた。それで五日市の方にずっとね……。向こうからどうも塩が入ってきたようです、西原には、……。

木俣：そういう問題をですね、地元の人が書かないとですね、……。もしも書くにしても若くして村を出て他で偉くなったような人が書いたりすると、地元で長く住んでいないから、本当のことは書かないですね。そういう二つのことがあるものですから、お話を伺って、是非、本にしたいです。

降矢：ワシヤ分かんないのです、その辺り。おそらく西原のいわゆる草分けのドンは、何でも秩父系統だろうと思う。尾根伝いにはいつてきた。やっぱり秩父は関東では古い国ではないですかね、ワシは秩父に行って調べたことがないから全然分らないけどね、……。そしたら仲間がね、向こう側に山葵の買い出しに行って向こうに泊まったりすると、何やら向こうもここと似たようなところらしいです。奥秩父の方は、……。

木俣：奥秩父にへもよく山登りに行きますけれども、食べ物の方からみていきますと、かなりでてくるのです。ちょっと細かいところで、……。

降矢：食べ物とか日常の**資料○**……。あまり拓けないうちに泊まって調べてみたいと思うこともあるけれども……。

木俣：いやあ、お供しますよ、冬だったらよろしいんでしょう。

降矢：寒い時はね暇だけれどもね、……。家をでるのが嫌になる。

木俣：お供しますから、秩父に出かけませんか、……。

降矢：○○○○が秩父に行ってきた……。オリア……。えらい場所があると**オコラれないか**、……。ワシが住むのに大変なところだと、……。

木俣：そうですね、そういう所もある。

降矢：それで、木俣さんの言われる話ではないですが、……。ワシも拓けても、なんにもならないか、これも一つの趣味だわね、……。

木俣：そうです。自分だって何もならないか、趣味ですね、……。学校勤めていて給料貰って、夏休みになるとこういうところを廻っていて、こういう雑穀の研究をしたって、誰も、いや誰もということもないですけども、ちっとも褒

めてくれる人はいないですね、・・・。

自分は雑穀とか雑草のことを研究しているんですけども、日本で自分の仕事をわかってくれる人は十人もいないのではないかと、・・・。

奥様：でもね、昨日も調べに来ましたよ。昨日、知らない人がオートバイでずっと登ってきて、すーと帰ったけどね、帰ったと思ったらその人が歩いて登ってきたんです。そして、ここに作ってあるのは何ですかと聞きに来たの、わざわざ。だから、キビだって教えたんです。ああ、あれがキビですかって、・・・。若い人でした。宅に休んでは行きませんでした、・・・。

木俣：じゃ、自分の教えていただいて書いたものを、少しは読んでくれている人がいるのかも知れない。

奥様：いるでしょう。確かにいるでしょう。

降矢：木俣さんと付き合うと、余計いろいろ面白いことがでてくるなあ。

木俣：やっぱり趣味は大切ですからね、仕事は仕事で、・・・。

降矢：この前、新たにどこから来たのか、和田・・・、あの雑草は幾年もしないで駄目にしたが、グンバイナズナ、実が軍配のような、・・・ここらのは実が違うわ。どこから持ってきたのか、・・・。

木俣：いやあ、学校にはいくらでも生えていますよ。平地だったら一発で生えるんじゃないですか。

降矢：珍しいだったから、種子をとって播いたりしたが、・・・。そこに自然に生えるまでに定着すればね、それから、ツルキキョウというか、・・・。

木俣：ツルリンドウですか、・・・。

降矢：キキョウだかりンドウだか、・・・あれはどうとう雑草に定着した。赤い実のなる奴ですね。あれは先生から鉢植えにしてあったのをいただいたもので、鉢から土手に定着して、そこらいっぱい植えてある。それをこの間、来た子供たちが欲しいなんて持っていった。

木俣：どこにでも、そういった変わった方が一人くらいいるものですね、・・・。

奥様：その人はですね、・・・。

木俣：そんな大事にしたら却って枯れちゃいますね。

降矢：これはよ、西原の草になったようだ。ワシが他所から持ってきたのか、ここには無いんだから、・・・。ワシも何処かにでかけりゃ、木の根を拾ってきたり、草の種子だって、何だって手当たり次第だ、・・・。フッフッフ・・・。三年ばかり先にモミジ狩りに行って種子を貰って、子供に怒られた。この人ががしゃがしゃ入れた中から、・・・と誰も怒りやしない、こぼれた種子・・・まだ、・・・種子播いたらよく発芽して、皆、見とれていたけれども、・・・。まったくキ(チ)カイダイ?がなくて出かけられないだな、・・・。長男のところを神代植物園に勤めていて、十一月か十一月下旬に出掛けていけばいろんな木の実がある。山歩くよりよっぽど良いや、・・・。

木俣：でも、人ばかりじゃないですか。

降矢：前に一ヶ月、公園の木の実拾いに、・・・モミジの実、・・・自分で拾っても、・・・自分の掌に広げるくらいならば、・・・。

木俣：そうですね、実くらいは、・・・いまでは車で来て、皆、持って行ってしまおう。佐野川の方では、畑のものまで持って行ってしまおうといいますが、このあたりはそうでもないですか。

降矢：この辺でも珍しい植物はね、トラックできてこいで持っていくだな。趣味程度ではない、金儲けだな、あれは、・・・。

奥様：そうして春先になると、こういうものを採ってきてこしらえる。

降矢：ところがなあ、不完全で牡だか牝だか、・・・ワシ、持って行った殆ど空になったり、・・・使えない。昔の珍しい物はまた年に一回くらいはやっておかないと、こうみ・・・。その台所にある貰ったツツジの木だかね、五葉ツツジという。八潮という奴はね、あれをね、こんど高い山に行ってこいできて、鉢植えにしようと思っている。上が長いから、これは惜しいので、スッパらって下げてきて、これを柱掛けにしようと、・・・。これに参議院（裏の家の降矢〇〇氏・・・）が俳句をつくるから、俳句を書いてもらおうと、・・・。ハッハッハッ。予約だけはしておかなきゃ、俳句だけは書いて貰うの、・・・。字も上手ですよ参議院は、・・・。

木俣：いろんなことやっておられるんですか、俳句とか書とか、・・・。

降矢：ええ、書道も結構、習っているし、端麗でな、・・・。この間、剣道七段の段取りに行って一回落ち、今度、二回目に七段になったな。山梨ではいく人もいないですよ、七段は。

木俣：何をやっているんですか、・・・。

降矢：剣道。

木俣：剣道をやっておられるんですか、・・・。趣味の多い人ですね。

降矢：参議院だってね、字が上手かったよ。若い人の中ではいちばん上手かった。老人の中にはもっと上手い人もいるだろうが、・・・。六十前ではな・・・。その色紙がそれでさあ。

木俣：上手いものですねえ。

降矢：運勢がいいんでねえ。戦争行って、中隊長やってきただあってね、声がつづくだね、・・・。

木俣：よく、御宅にはみえられるんですか。

降矢：いや、めったにきませんしね、家はすぐ上だからね。

木俣：いや、こっちにおいでになるんですか、・・・。東京ばかりでなく、よくこちらに帰ってこられるんですか。

降矢：二分の一くらいは来て、泊まっているようですね。甲府の方に帰るよりもここからの方が近いと言ってね、県庁に行くのに楽だそうですよ、・・・。

木俣：中央高速道路が近いですからね、・・・。

降矢：金曜日によく帰ってきますよ、日曜には休みますからね。

木俣：いいですね、西原からそういう人が出るということは、いまどき、なかなかないですからね。そういうこと、みな、街中の人ばかりで、・・・。

降矢：西原からそう言う人がでるといっただけで、若い衆には特に良いですよ。参議院になったという人もいるということで、身近に感じられますから。努力すればなれるという目標・・・。

木俣：西原の方がたは、・・・) 教育熱心じゃないですか。

降矢：最近は、まあ、教育ブームというがどこでもまあ、・・・教育に熱心なのでしょうね。熱心だけど、何か欠けているのでしょうかね、教育はウンと受けているようですが、結果的にはたいしたことはないからねえ。時代が進んでいるせいでか何のせいでか分からない。いまの教育には、何か欠けているんじゃないかなあ。なにが欠けているか、・・・さあ、どうも、我々にはわからないが、・・・。

木俣：皆、楽しみたいから駄目なんでしょう。

降矢：まあ、煎じ詰めるとそういうことなんでしょうね。楽しんでお金をうんと取るという。

木俣：得したいと思うことは誰でも悪気はないでしょうけれども、自分の手で仕事をやって楽しみたいというのではなく、人にやらせて楽しみたいと、そういうところが多いようですよ。

降矢：せっかく生まれてんだから、苦勞をしても何にしても、一つの目標に見つけた価値のために取っ組んでやり抜くというようなことは、あまり少ないんだか、何だかねえ。

木俣：自分たちくらいの30歳前後の人間は、割とそういうことをやってきたんですけど、今の20歳前後の学生の人たちはなおさらですね、そういう気持ちは、・・・。

降矢：ワシやまあ、末っ子が大学二年になったときか大学卒業の頃、オヤッサン、大学卒業しても何なるべえか、・・・卒業したって俺は一生何なるべえかて言う、そういうことが決まらない人が大半だと言うんだ、・・・。

木俣：そうです。

降矢：・・・えれえこったね、若い衆が笑えん？だろうが、俺には納得がつかないんだ。

木俣：二十いくつにもなって分からないわけですからね、・・・。

降矢：その辺りだけど、・・・、人間せっかく生まれてきたからには、何かやってみなければ惜しいんじゃないか、・・・。だから、ワシや、百姓しながら西原に住んでから、西原の草木の名くらい覚えてたらよいなとね、西原の留守居じゃね。路傍の石仏一つでもね、みんなどういう意味で立てられたんだか、・・・

そのくらいは**テイテイブカイ?**で覚えて、後の者に継ぐくらい、これも一つ、村を継いだ者の務めだからねえ。

木俣：しかし、そう言ったあたり、是非、伺ってですね、まとめて、・・・。

降矢：それだからね、それをいまだってね、それを何の歳にやるか、口はうまいがななか実行が伴わない。それでも折りにふれ普通事？に目をつけていますかね。ワシヤのはその程度でね。今日は休んでいるから一つ**ひどけているから？探しこうが、チョウキ**資料館の誰かは、仲間で廻って、どこどこにこういうのを見ようとか誘われれば出かけて行くんど、独りで出かけるとなると、・・・。そういう風に行って、西原に満足しているというのは、若いうちから西原に住みついたわけではないんだ。やっぱり、人間というのは、・・・お前のひとつの宿命というのがあって、どうしても村に残らない運命の人間もいるしね、・・・。

木俣：そうです。

降矢：結局、それ面白くなかつととって、ヤケを起こして暮らしたって一生は一生ね、・・・。そんなもんだから、自分なりの生きて行く道を考えて、西原でも満足することを考えて生きて行くも・・・、同じ生きるんではね。その意味で、いまいう一生の仕事をワシヤ、探してきた。西原に住んで、雑草でも、虫でも、何でも機会があれば名を覚えるとか、習性を知るとか、そういう風に心がけてきた。何もしないで安かことして一生を終わるといふのかね、・・・。何になるかって言われりゃ・・・。

(第二巻B面終了)